
黄泉倶楽部

ぱくどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄泉倶楽部

【Nコード】

N9212C

【作者名】

ぱくどら

【あらすじ】

迷い込んだ道の途中その占い屋がある。過去を見て未来を占う『黄泉倶楽部』。迷い込んでしまったマコトに、婆の決断は……

プロローグ 来客

ふと気がつくと夜空を眺めていた。道の真ん中に立ち、車が来ることを恐れずにただ夜空を見ている。

我に返り、周りを見てみると見知らぬ場所だということに気がついた。暗い路地に街灯もなく、人がいる気配さえない。

なぜ僕がここにいいのかと、記憶を遡ってみたがどうにも思い出せない。格好を見ると大学へ行ったか帰ってきたかのどちらかのようだ。

しかし、なぜか荷物を持っていなかった。もしかしたらどこか置き忘れたのかもしれないと思い、少し歩いてみることにした。

5分ぐらい歩いたと思うが、全く人と会わなかった。というよりも、人の気配が全くない。

道の左右高い塀が立っているため、家があるのかさえ確認できない。ただまっすぐに道が伸びているのみだった。

が、その道の先を見てみるとなにかが光ったような気がした。目を凝らしてみると淡い光が見えた。

ほっとした僕は、荷物のことを忘れ駆け足で光を目指した。

近くまで駆け寄ってみると、なにやら平屋建ての家のようだった。ふと、玄関の横に木製の板の看板が置いてあることに気がついた。

その看板には黄色で文字が書かれてあった。

『黄泉倶楽部』

旅館の名前だろうか。それともなにか団体の名称なのか。僕はその意味を理解できなかった。

ただ、この家のことを指しているのは間違いなさそうだった。周りにはこの家を除いて、建っている家がなかった。

道の先に視線を戻すと冷たい塀がまっすぐに続いている。暗いためかその先になにかあるのか確認できない。

この家の住人ならばこの場所がどこなのか知っているかもしれない。そう思った僕はこの家の玄関を叩いてみた。

「……あの、ごめんください。どなたかいらっしゃいませんか？」

が、反応はない。少し待ったが、それでも反応がない。確かに窓のガラス越しからは淡い光が漏れている。

「……すいません、少々尋ねたいことがあるんです。お邪魔してもよろしいでしょうか」

どん、どん、と少し強めにドアを叩いてみた。すると、ドアの向こうからガチャという鍵が開くような音がした。

そこでドアノブを握り少し引いてみると、ドアが少し開いた。これは入っても良いということだろうか。

恐る恐るドア開けて、中の様子を見てみた。

「お邪魔します……」

部屋は一室しかないようで、床一面に真っ赤な絨毯が敷いてある。玄関のすぐ右手にはステンレスの台所がある。

台所の上にはミキサーや包丁が出しっぱなしになっていて、なにか料理をした後のようだった。

また、部屋のあちこちにろうそくが吊るしており、ゆらゆらと弱い灯りを放っていた。

部屋全体を見ると、壁を覆うほどの本棚がずらりと並んでいる。どのような本なのか確認できないが、どれも分厚い。

部屋の真ん中には小さめの丸いテーブルと、そのテーブルを挟むように椅子が二つ置いてある。

テーブルの上には、丸い水晶玉が一つと本が一冊開いたまま置かれてあった。

「……あの……」

ろうそくの灯りが弱いため、部屋の奥までどうなっているのかは見えなかった。だが、住人がいるとなると奥にいるのだろうか。

部屋の奥からごそそと物音が聞こえる。物音がぴたつと止むと、暗闇から人が出てきた。

「お疲れ様。……入りな。その椅子に掛けるといい」

暗闇から、黒いフードとローブを羽織った人物が出てきた。

人であるのは間違いなさそうだったが、フードをかぶっているため口が見えない。

しゃがれた声の持ち主のようで、声を聞く限り高齢者だろう。僕より背が低い背筋を伸ばし歩いている。

「さあ、とつと入ってドアを閉めておくれ。あんたの席はそこだよ」

その人は椅子に腰掛けると反対側にあつた椅子を指差した。ここに座れということらしい。

僕は恐る恐る部屋に入ると、ドアを閉めた。入ると、ろうそくの灯りの揺らぎと床一面の真っ赤な絨毯のせいか部屋全体が赤く見えた。部屋の奥は灯りが届かないのか、相変わらず暗くどうなっているのか見えない。僕は土足のまま椅子に腰掛けた。

すると、その人はテーブルの上に置いて置いてあつた本をおもむろに開き直した。

「あんたの名前は？」

「……飯田マコトと言いますけど、あなたは……」

「飯田……マコト、はてどこかな」

骨と皮しかないような手の指でなにかを探すかのように本をなぞっている。真正面にいるが、相変わらず顔は見えなかった。

「……あの。あなた……」

「今は婆と呼びな。お、あつたあつた。……あら、おかしいねえ」

婆と名乗った人は、本の同じところを指で何度もなぞっていた。

何かを確認しているようだった。

僕は意を決して質問をぶつけることにした。

「あの、ここはどこなんですか?! 僕、気がついたら外の道路に立っていたんです。」

ここに来る前の記憶が思い出せなくて、どうやって来たのかわからないんです。ここはどこですか、教えてください！」

すると、婆はなぞっていた指の動きをぴたりと止めた。

「記憶が思い出せない？……ふん。そういうことか」

婆は開いていた本の閉じるとテーブルの端に寄せ、代わりに水晶玉を自分の正面に持ってきた。

「ここは黄泉俱樂部。……そうだね、あんたらの言葉でわかりやすく言うなら占い屋さ」

「占い屋？……一体なにを占うんですか？」

婆は水晶の上に手をかざし、念じるかのように動かし始めた。

「あんたの未来さ。この先あの世に行くのか、現世に戻るのか。」

「え、あの、それはどういう意味……」

「今からあんたに5つ質問するから答えな。それを聞いた上である世か現世か、あんたの未来を……」

「待つてください！」

思わず椅子から立ち上がった。半分冗談だろうと思いつつも、僕は震える声を抑えて声を出した。

「ま、まさか、僕は……死んだんですか？」

婆は一旦動かしている手を止めた。婆は水晶を覗き込んだ。

「ふむ。あんた、大学へ行く途中の電車で事故に巻き込まれたようだ。幸い、死んではない」

「……あなた本当に占い師なのか？事故に巻き込まれたなんて、そんな記憶はない……」

立ちすくむ僕に対して、婆は座れというかのように手の平を上下に振った。僕は渋々それに従った。

「ここに来る大抵のやつらはあんたと同じことを言うよ。だが、本当のことさ」

「嘘だ！これはなにかの夢なんだ。信じられない……。一体どうして」

「本当だよ。しかし、あんたがここにいてことは危ないってこ

とだろうね。

「ここは……あの世と現世の境の場所なのだから。ここに来た限り
婆に付き合ってもらうよ」

ブログへ来客へ（後書き）

お読みいただきありがとうございます。いかがでしたでしょうか。もし、興味を持たれたのでありましたら、この先もお付き合いたいと思います。

実は久しぶりの投稿で、相変わらず文章がめちゃくちゃです。ですが、がんばって連載をしていきたいと思っています。

と言いましても、当初短編で載せようと思っていたもので、短い連載になると予想します。

今度こそ連載を途中でやめないように、執筆をがんばっていきますのでどうぞよろしくお願い致します。

第一の質問

気付けばあの世と現世の境に立っていて、しかも現世の僕は危険な状態らしい。

そう僕に説明した目の前の婆は、フードから唯一見える口の端を吊り上げ僕に囁いてきた。

「あんたが今この世界にいるということは、生と死の狭間にいるってことさ。素直に婆に従うことだね」

異様な雰囲気の中での婆のしゃがれた声は、恐ろしく僕の頭の中に響く。

「従えつて、一体なにをするつもりなんですか。それにあなた一体何者ですか」

手に汗を握り思わず力が入る。椅子に座っているが落ち着かず、逃げようにも腰を上げられない。

「さっき言っただろ、5つの質問に答えるんだよ。婆が何者かと聞くまえに、質問に答えてもらおうよ」

そういうと婆は再び水晶に手をかざし念じ始めた。

「まず、質問に答えやすくしてやろう。この水晶の上に手をのせな」
婆は僕が手を乗せるのを待つかのように、手の動きを止めている。婆が何者なのか気になったが、状況を理解できない今素直に従うべきだろう。

それに、もし婆が襲ってきても体格的に僕のほうが有利だ。一呼吸をして、水晶の上に手を置いた。

「あんたが今記憶を思い出せないのは、生きているとも死んでいるとも言えないからさ。……婆が手助けして記憶だけをこちらに呼び寄せてやろう」

婆は再び水晶の上で手を念じるかのように動かし始めた。

すると、手を乗せている水晶が熱を帯び始めた。熱を感じると同時に、様々な風景が僕の頭の中に流れ込んできた。

それぞれの風景がつながっていき、僕の記憶として蘇ってくる。

電車の中。憂鬱な朝。大学三年になった今でもその気持ちは変わらない。

僕を拒んでいるこの世界から抜け出したい。早く楽になりたい。

はっと我に返ると、目の前にいた婆はひじをテーブルにつき手を組んでいる。

水晶によつて僕の記憶と、僕の感情も流れ込んできた。その感情によつて、自然と顔がうつむく。

「……さっきより顔色が悪そうだ。でも、それがあんだだったのさ。ま、質問をしていくよ」

僕はうなづいて答えた。婆の言うとおり、胸が苦しい。僕という存在が嫌になっている。

「第一の質問」

婆の声が先ほどよりも大きくはつきりと聞こえる。先ほどとは雰囲気の違いに僕は顔を上げた。

婆は背筋を伸ばし、手はテーブルの上から見えなくなっているのでひざの上に置いているのだろう。

口しか見えないためどこを見ているのかわからないはずだが、なぜか威圧を感じる。僕も姿勢を直した。

「もし、あんたが死んだら、何人の人が泣いてくれると思う？」

「え……？」

なにを聞かれるのかと思いきや、おかしい質問だった。だが、婆の口は緩むことなく真一文字に口を閉ざしている。

「あ、いや……そんな、僕のために泣くななんて一人もいないと思いますけど。僕が死んだって誰も気にしませんよ」

「なぜだい？」

「なぜって……。僕はそういう存在だったんです。さっきの水晶玉で思い出したんです。」

僕は……いるかいなかわからないような、そんな存在だった。だから僕を気にするような人いません」

そう言い切ったとき、なぜか悲しくなった。だが事実だった。ゼミでも目立たず、講義が終われば寄り道することもなく家に帰る。家に帰っても友達を呼ぶこともなく、一人家事をする。

一人暮らし三年目に入ったせい料理の腕が上がってきたと思うが、それを自慢する友達もいない。僕は孤独だった。

「ふん、そんなことだろうと思ったよ」

と婆がしゃがれた声で素っ気無く言った。

「別にあんたが死んで誰が泣こうが何人泣こうが、それは関係ないことさ。」

婆が知リたかったのは、あんた自身であんたに対する他人からの評価をどう思っているかさ。

……初めに言うておくが婆は、死ねば自分が変わる、やら、死んで楽になりたいと、思ってここに来るやつらが嫌いなんだ。

どこに行こうがそいつはそいつなのに気づいていないんだ」

怒っているのか婆の声が少しだけ大きくなっていた。質問に答えただけなのにどうして怒られなければいけないのか、僕は少しむっとした。

「ぼ、僕は婆の質問に答えただけです。この質問が一体なんだっていうんですか」

少しだけ強く言ったのだが、婆は口を閉ざしたままだった。顔が見えないと一体なにを考えているのかわからない。

婆は黙ったままテーブルの隅においていた本を細い手で引き寄せ、指でなぞるように何かを確認し始めた。

「……ふん、文字が出始めたね。さつさと次の質問に移ろうか」

理解できず首をかしげた僕だったが、婆は気にする様子もない。

婆はまたどこか威圧されるような雰囲気になり、僕もそれ以上問うことができなくなった。

マコトの言い分

「会いたい人、一言言い残したい人はいたか？」

婆はそういうと再び口を真一文字に閉ざした。僕が答えるのを待っているようだった。

僕はまた予想外の質問にすぐに答えられなかった。『会いたい人』とは一体どういう意味なのか。

「え……会いたい人ですか」

あちこちにあるろうそくの灯りがゆらゆらと揺れ、床一面に敷かれている赤い絨毯がその揺らぎをより幻想的なものになっている。

異様な部屋の中に婆の黒いローブだけがはっきりと映り、婆に対し恐れさえも感じるほどの雰囲気させていた。

「そ、そうですね……」

婆の見えない圧力に急かされるように、今まで会った人たちの顔を頭の中に思い出していった。

しかしどの人も、深い付き合いでもなく、特別な関係でもなく、ただ時間が過ぎる中ですれ違った人たちという認識でしかない。

たまたま席が隣だった背の低い藤井さん。余りもの同士よくペアを組まされていた野中くん。今ゼミが一緒の学生たち。

会いたいか、と言われると別に会いたいとは思わない。ただ、いたなあと思うぐらいだ。

黙り込んだ僕にいらだったのか、婆が咳払いをして口を開いた。

「…あんた、いないのかい。ったく、どこまで寂しいやつなんだい」と婆は呆れたようにため息を漏らした。

「もういい。あんたにはそういう大切な人さえもいなかったのだから」とそういうと再び婆は水晶を念じるように手をかざし始めた。

——大切な人。

その言葉がずっと僕の頭の中に入ってきた。再び僕は過去を遡っていく。

「婆さん。会いたい人っていうのは……大切な人っていう意味なんですか？」

婆は手の動きを止め、閉ざしていた口を再び開いた。

「さあね。……だが、ここに来たやつらに同じ質問をすると、大概自分の大切な人とか尊敬する人なんてことを言うねえ。

別に婆はいるからといって何もしないがね。ただ、いるのかいないのか知りたいだけさ」

「いたら、なにかあるんですか？」

婆は再び手を膝に置き、背筋を伸ばした。どうやら新たな質問に移るようだ。

「ふん……。なにもありやしないよ。ただ知りたいだけだ。……この質問は終わりだ。次の質問に移る」

真一文字に口を結び、ほんの少しの間沈黙が流れる。僕も姿勢を直し、婆が口を開くのを待つ。

「現世にやり残したことはあるか？」

またおかしい質問だ。僕はフードをすっぽりとかぶった婆を見ながら、その言葉を反芻した。

——やり残したこと？

「え、つと。ないです。むしろ現世から離れられて少しほっとしているから……」

「ほっとしている？」

心なしか婆の声が少し大きく聞こえた。思わずビクついてしまったが、僕は続けて言った。

「げ、現世には僕という存在を認めてくれる人なんていなかったんです。むしろ僕を攻撃してくる人ばかりで……」。

いつもどうやったら楽になるのだろうと、考えていました」

僕は淡々と言った。婆は黙って僕の話の話を聞いている。

「現世にやり残したこと……というより、僕は現世に未練がないんです」

そう言い終えると、再び沈黙が流れた。すると、婆は黙って水晶に手をかざし始めた。

相変わらずうそくの灯りは揺らぎ、物音一つしない。ただ、先ほどから寒気がしている。

「次の質問をする予定だったが、現世に未練がないというのなら……する必要もなくなった」

婆はかざしていた手を下ろし、また本の見開きを指でなぞるように確かめ始めた。

「……本来ならこのまま結果を言うのだが……あなたが気に食わない」

「えっ」

婆は本から指を離すと、水晶を指した。

「水晶を覗いてみな。大馬鹿野郎のあんたにいいもんを見せてやる」

未来

婆は黙ったまま、ぴくりとも動かない。部屋の中は相変わらずうすくの灯りがゆらゆらと揺れ、物音一つしない。

婆が僕のなにを気に入らないのか、また結果とは一体どういう内容なのか。水晶を覗き込む前にそれらが気になった。

が、婆がその疑問に答えてはくれそうにない。嫌な威圧を感じ、それらの疑問の言葉を飲み込み恐る恐る水晶を覗き込んでみた。

水晶の中に、見たことのある風景が映っていた。小汚く狭い部屋見たことのある家具、出しっぱなしの本。それは間違いなく僕の部屋だった。

そして、その部屋の中でせかせかと動いている人物がいる。……あれは僕だ。

大学へ行く準備でもしているのだろうか。それにしてもなぜ僕がこの水晶に映し出されているのだろう……。

「驚いたかい。そこに映っているのはあんただ」

「これは一体どう意味なんですか？僕であることは間違いなさそうですね、これはいつのことなんですか？」

水晶に映る僕は準備を終え、玄関を出るところだった。しかしあふれた光景のため、一体いつのものなのかわからなかった。

「これはあんたの未来さ」

「……え？」

僕は意味のわからない婆の言葉に、それ以上言葉が出てこなかった。そんな僕を見てか婆の口の端がつりあがり、笑っているように見えた。

「まあ未来であることは間違いない。……ただし、あくまで一例さ」

「一例？」

「……水晶を見ていりゃわかる」

僕は婆に言われた通り、水晶を再び覗き込んだ。水晶の中の僕は、アパートを出て大学へ向かっているようだった。

大学へつくまで普段の僕と変わらない風景だった。これが本当に未来なのかと、少々疑問に思えてきた。

が、すぐに信じられない光景が映し出された。

ゼミの教室に入ると同時に、僕は笑顔でほかのゼミ生に挨拶をした。それに応えるようにほかのゼミ生も笑顔で僕に挨拶をしている。僕はそのまま席に座ると、その挨拶をしたゼミ生が僕のところにやってきて会話を始めた。僕は楽しそうにゼミ生たちと話している。

「……これは一体なんですか？」

「だから、あんたの未来だと……」

「嘘だ！」

思わず大声で怒鳴った。婆は開いていた口を閉ざした。

「僕に話しかけてくるやつなんていないんだ！ゼミの教室に入っても僕はずっと一人だ。いいや！大学にいる間ずっと僕は一人で過ごしている！」

なのに、なのにこの水晶に映る僕は違う。こんなの僕の未来なわけがない！それとも、今の僕を馬鹿するためにこんなものを……」

「いい加減にしろ！」

婆が大声で僕を一喝した。その声は空気までも震えるような、そんな大きな声だった。僕はびっくりして我にかえた。

婆は開いていた本を手につくと、その本を僕に見せるように水晶の横に開いたまま置いた。

「……この本はどのページも人の名前とその人に関する情報が細かく書かれている。いや……正しくは浮かび上がってくる」

「う、浮かび上がってくる？」

「ああ。なぜなら……この本は死者の本だからだ」

「死者の本……？」

意味を聞かなくてもなんとなくその本の意味がわかるような気がした。さきほどから寒気を感じているが、それが一層強く感じられ

る。

恐る恐る開かれている本を見てみると、そこには両ページびっしりと人の名前が書かれていた。

人の名前がページの一番左に書かれていて、すこし間を空けてその人の性格、次に所在地、現世での様子など書かれてある。

一ページにおよそ五十人以上書かれていて、字が小さく、見た感じではページが黒くなっているようにしか見えないほどだった。

その本を眺めていると、婆の老けた手が伸びてきてあるところを指差した。

「ここに薄く浮かび上がっている名前を見てみな」

僕は婆の指差すところを凝視した。確かにそこにはうつすらと、文字のふちをかたどっているかのような薄い字が浮かび上がろうとしていた。

「イイ……ダ……マコ……ト?! これは……僕の名前じゃないですか!」

「そうさ。あんたもこの本に載ろうとしているのさ。……この意味、言わなくてもわかるだろう?」

僕は本から目をそむけた。きっとこの本に載っている人たちはもう死んでしまった人たちばかりなのだろう。

つまり、僕の名前が載ろうとしているということは僕は死にかけているという意味だ。

「……この本とさつき見せた水晶の中に映る僕と、一体どういう意味があるんですか? もう僕はもうだっていいんです、早く結果を教えてください」

「まあ結果を知りたがる前に、水晶のあんたとその本について説明してやろう」

水晶の中に映る僕を見てみると、相変わらず楽しそうにゼミ生と会話をしている。

水晶の僕は今までに見たことのないような明るい表情で、今の僕とは大違いだった。

こんな僕が未来の僕とは信じられない。見ていると腹が立つほどだった。

「その水晶の中の世界は、間違いなくあなたの未来さ。ただし、さつきも言ったように一例でしかすぎない」

「一例って……でも僕の未来なんでしょう？それとも僕の未来は複数あるってことですか？」

「ああそうさ」

婆が冗談を言っているとは思えなかった。淡々と語る婆を僕は黙って聞いた。

「この水晶に映っているあなたは、この生死の狭間から生き返り、今までの人生を悔いた。

死という絶対的な恐怖を体感したことによってあなたの考えがガラリと変わったのさ。

人と接することに対し怖気づいていた自分を変えたい、もつと人と交流したいと思うようになった。どうすればいいかと考えた結果がこれさ」

水晶の中の僕は、確かに僕で間違いなかったが顔の表情が全く違う。

ゼミの講義が始まったが、うつむく様子もなく発言者をしっかりと見ている。その瞳に濁りは一切見えない。

考えが違っただけでこうも人間は変わるものなのだろうか。

「その結果自分を変えようと努力をした。最初はうまくはいかなかったが、それでも努力をした。

やがてあなたにも友と呼べる人ができた。……例えばこの水晶のあなたは、手料理をゼミで披露したことによって打ち解けたみたいだよ」

婆は再び水晶の上で手をかざし始めた。なにかを念じ始め、やがて水晶の中に別の風景が映し出された。

「……正直うらやましいです。手料理は僕のなかで唯一自信があることです。そんな未来が僕に用意されているなんて……」

「ふん。あんた、人の話をちゃんと聞いているのかい？この未来は一例だと何度も言っているだろう。……もう一度水晶を覗きこんでみな」

言われる通り、再び水晶を覗きこんだ。

が、水晶は真つ暗でなにも見えない。目を凝らして見続けていると、ゆっくりと人の形をしたものが浮かび上がってきた。が、様子がおかしい。

暗いもやが晴れていくと、そこには人が倒れていた。地面にはべつとりと血の海が広がり、その上に息絶えたであろう人が倒れているのだ。

「ひっ！」

思わず水晶から後ずさりをした。だが、婆は素っ気無く僕に言い放った。

「これもあんたの未来の一例さ」

顔が青ざめていくのがはつきりとわかった。自分が死んでいるところを見るのがこんなにも恐ろしいことだとは思わなかった。声が震えるのを抑えながら声を絞りだした。

「じゃ、じゃあ今水晶に映し出されている人は……僕なんですか？！ど、どうしてあんなことに……」

「せっかく助かったのに、あんたは死という結果を捨て切れなかった。その考えが態度にも出てしまったんだろっねえ。」

ますますあんたの存在は薄くなり、嫌がらせやいたずら、拳句の結果てには犯罪にまで巻き込まれてしまった。

耐え切れなくなってしまったあんたは自ら命を捨てた。それだけさ」

「そ、そんな……」

「ま、一例だ。そんな気にすることじゃない。どの未来を選ぶのか、それともこのまま死を選ぶのか。ふふ、おもしろいだろう」

婆はにやにやと笑った。

「まったく、人間というのはおもしろい生き物さ。生きたいと懇願

するやつもいれば、あんたのように死を選んだがるやつもいる。

それぞれどう選ぶかが婆は知ったこっちゃないが、いろんなやつを見てきて思ったことがある」

というと、婆は本をぱらぱらとめくり始めた。僕は黙ってその様子を見た。

「……ここにいる記してあるやつと全員、あんたと同じように質問した。

死と生。生きている間、死後のことなんてわかり得ない。だから簡単に死を選ぼうとする。そりゃ死ねば少なくとも今から逃げられる。

婆からみりや同じ人間さ。人間同士がなにをしようが関係ない。ここにすれば皆、死者なんだ。

生きていたなかで起こった出来事は必ずこの本に文字として浮かび上がる。どんなに現世で隠そうが出てくる。

仕打ちを受けた側、仕打ちをした側、必ずここで清算される。ここは現世ではないからねえ、それに事情など興味がない。

この本に記されているやつの中にも、たくさん死を望んだやつがいるよ。こいつらは婆からすれば哀れだ。

あんたにもさっきから見せている通り未来なんて決まっていなかったまま今まで歩いてきた道が悪かっただけなんだよ。

それに気づかないで悪い道をひたすら歩こうとする。そりゃ途中で逃げ出したくなるさ。……そんなやつらを見ると腹が立ってきてね」

婆はぱたんと本を閉じた。

「そこであんたに未来の一例を見せてやったのさ。……簡単に考えなんて変わるわけないことは承知さ。

それでも人間は優秀だ。一つ奮起すれば少しは世界が変わる。あんなも、そういう風になるかはわからないがね……」

さきほどまで感じていた寒気が少しずつ遠のいていき、楽になっていた。さっきまで死しか頭になかった僕だが、迷っていた。

迷っている自分が恥かしく、婆を見ることができなかった。僕は黙ったまま俯いていると、婆はいきなり立ち上がった。

「立ちな。あんたはここにいるべき人間ではない」

「え？そ、それじゃ……僕は」

「そうだ、あんたの占いの結果は、現世だ。さあこの部屋から出るんだ」

婆は僕の腕を掴むと、そのまま玄関へと僕をひっぱった。見た目の割りにかなり力が強い。

「ちょ、ちよつと！現世に戻るって一体どうやって戻るんですか！それに僕はまだ婆に聞きたいことがたくさん……」

婆は僕を気にする様子もなく、玄関のドアを開けた。すると、いきなり直視できないほどに光っていた。

まぶしすぎるため、その向こうになにかあるのかさえ確認できない。婆は玄関を開くと、玄関の横にあったシンクからなにかを取り出した。

「現世に帰るための薬だ。飲みな」

なにかを確認するまえに、婆に無理やり口に押し付けられ飲み込んでしまった。なにか生臭い飲み物だった。

そのせいで咳き込む僕の腕を離し、婆はその様子を黙って見ていた。「……なんですか、いきなり飲ませるなんて。本当にこれで……」

落ち着いた僕を確認すると、婆はいきなり僕を強く押した。

とっさのことで僕はよろけながら玄関から出そうになる。光る玄関の外に倒れそうになる前に、少し婆が見えた。

「……婆は人間ではない。もし、次ここにきたら正体を教えてやるよ。それまで悔いの人生を歩むんだね……」

その口元はにやけていた。

それきり僕は意識を失った。僕はどんな未来を選ぶのか、それは僕自身にしかわからない。

未来（後書き）

以上で、この作品は終了です。

…… なんとというか、シリアスな作品は私には向いていないということが改めてわかりました。

物語がむちゃくちゃになってしまいましたね。申し訳ないです。しかし、なんとか話をまとめることができました。

生と死について書きたかったんですが、やはり簡単ではありませんでした。

まだまだ文章能力が不足のようです。。がんばります。

ここまでお読みくださり、心より御礼申し上げます。

ありがとうございます。

今更ながら気づいたのですが、プロローグとあるのにエピローグがありませんでしたorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9212c/>

黄泉倶楽部

2010年10月11日00時47分発行